

2012

東アジア学会第 22 回大会

プログラム・報告要旨集

日 時：2012 年 10 月 6 日（土）

会 場：福岡大学

東アジア学会第 22 回大会

— ボーダーレス時代の東アジア —

大会プログラム・報告要旨集

日時：2012 年 10 月 6 日（土）午前 9 時 30 分～午後 5 時 30 分（受付 9 : 00～）

場所：福岡大学 2 号館（商学部棟）3 階

（〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1）

懇親会場：福岡大学中央図書館 1 階 フォレスト

主催：日本東アジア学会

共催：韓国ビジョンと連帯 21

午前の部（9：30～12：00）

■ 自由論題研究報告（2号館3階 23D教室）

座長：新谷秀明（西南学院大学国際文化学部教授）

第1報告（9：30～10：05）

「映画の街・釜山の人びと vol.2 ～『映画の殿堂』の理想と問題」

報告者：西谷郁（福岡インディペンデント映画祭代表）

第2報告（10：05～10：40）

「日本企業の海外進出のあり方についてータイの洪水後の日系企業の動向ー」

報告者 松下愛（久留米大学大学院比較文化研究科後期博士課程2年）

第3報告（10：50～11：25）

「ボーダーの認識とボーダーレスへの努力～エドウィン・ライシャワの韓国問題、沖縄問題への関わりと、現代への教訓」

報告者 高嶋幸世（元西南学院大学文学部講師）

第4報告（11：25～12：00）

「朝鮮・日本・欧米の美術交流の観点から考える韓国近代彫刻」

報告者 文芝瑛（西九州大学非常勤講師）

昼食（12：00～13：00）

中央図書館1階 陽だまり・フォレスト ほか

午後の部（13：00～17：30）

■ 開会あいさつ（2号館3階 232教室）

徳島千穎（東アジア学会会長/（株）トクスイコーポレーション代表取締役会長）

呉東河（ビジョンと連帯 21 会長/釜山発展研究院主席研究員）

◇ 第1セッション「東アジアにおけるディアスポラ」（13：10～16：15）

座長：波瀾剛（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）

第 1 報告 (13 : 10~13 : 50)

「境界人としてのサハリン韓人」

報告者：韓恵仁（建国大学校研究教授）

第 2 報告 (13 : 50~14 : 30)

「故郷は遠くに在りて：韓国における多文化社会政策と排除の政治」

報告者：池直美（北海道大学公共政策大学院専任講師）

第 3 報告 (14 : 30~15 : 10)

「東アジアの境界、和解と共生」

報告者：金泰萬（韓国海洋大学校東アジア学科教授）

討論 (15 : 10~16 : 00)

討論者：趙顕章（海東病院内科課長）

申明直（熊本学園大学外国語学部東アジア学科教授）

フロアからの質問 (16 : 00~16 : 15)

◇ **第 2 セッション** (16 : 30~17 : 30)

「日本から『北』へ帰った人の物語り」

報告者：韓錫圭（オッケトンムー北から帰った人たちを支える会）

懇親会 (18 : 00~20 : 00)

会場：フォレスト（中央図書館 1 階）

≪目 次≫

■ 自由論題研究報告

- 1) 「映画の街・釜山の人びと vol.2 ～『映画の殿堂』の理想と問題」

報告者：西谷郁（福岡インディペンデント映画祭代表） (07)

- 2) 「日本企業の海外進出のあり方についてータイの洪水後の日系企業の動向ー」

報告者 松下愛（久留米大学大学院比較文化報告科後期博士課程2年） (09)

- 3) 「ボーダーの認識とボーダーレスへの努力～エドウィン・ライシャワーの韓国問題、沖縄問題への関わりと、現代への教訓」

報告者 高嶋幸世（元西南学院大学文学部講師） (11)

- 4) 「朝鮮・日本・欧米の美術交流の観点から考える韓国近代彫刻」

報告者 文芝瑛（西九州大学非常勤講師） (18)

■ 共通論題ーボーダーレス時代の東アジアー

- 5) 「境界人としてのサハリン韓人」

報告者：韓恵仁（建国大学校研究教授） (21)

- 6) 「故郷は遠くに在りて：韓国における多文化社会政策と排除の政治」

報告者：池直美（北海道大学公共政策大学院専任講師） (31)

- 7) 「東アジアの境界、和解と共生」

報告者：金泰萬（韓国海洋大学校東アジア学科教授） (39)

- 8) 「日本から『北』へ帰った人の物語り」

報告者：韓錫圭（オクケトンムー北から帰った人たちを支える会） (43)

【自由論題研究報告】

報告要旨

1) 映画の街・釜山の人びと vol.2 ～『映画の殿堂』の理想と問題

西谷 郁

本報告は、報告代表者である西谷が、2005年より開始した研究テーマである「都市と映画・映像創造環境の研究 ～釜山映画祭を中心に～」(2005年度財団法人福岡アジア都市研究所若手研究者研究活動助成)を継続調査・研究した第2回目の報告である。第1回目の研究報告は、アジアフォーカス・福岡映画祭2006年において西谷が「映画の街・釜山の人びと」と題し発表した。

本研究テーマは、7年にわたり継続調査・考察中である。その間、石橋愛加氏(九州大学大学院生)と橘剛史氏(映像ディレクタ)から調査を協力・支援していただいた。とくに、2011年から2012年の調査においては、ビデオカメラを用いた参与観察やインタビュー調査を3名が共同で行ったため、本報告では、3名による共同研究報告とする。

本報告の特徴は、ビデオカメラを用いたインタビュー調査と口頭発表、報告文章という3つの研究成果の複合的な報告スタイルにある。調査研究の対象が「映画・映像」であるため、また、口頭発表・文章報告だけでなく、より積極的な参与観察の社会動態調査を目指すため、動画映像による記録、および、ドキュメンタリ作品の制作にも重点をおく。そこで、映像クリエイターであり釜山との交流も深い橘剛史氏に、インタビュアーとして、釜山に留学経験があり、映画祭関係者との人脈も深い石橋愛加氏の協力を仰いだ。

2011年に、釜山における映画・映像を取り巻く環境は大きく変化した。釜山で最大の映画イベント、釜山国際映画祭のメイン会場が、それまでのナンポドン地区より、ヘウンデ地区・センタムシティ地区へと移動し、そこにメディア・センターや巨大なデパートなどの商業施設、行政・教育機関が集合し、韓国最大の映画・映像のメディア・タウンが突如出現した。その最も象徴的な存在が釜山国際映画祭のメイン会場である『映画の殿堂』である。

『映画の殿堂』は、巨額の国費により建設された。首都ソウルに一元化しがちである韓国の映画・映像産業を、釜山へ分散することで「アジア映画のハブ」としての釜山の役割を韓国政府が推進するためである。一方で、釜山市民に親しまれてきたナンポドン地区のミニシアターや、シネマテーク、映画スタジオは閉鎖に追い込まれ反対運動もおこった。そのことに対する市民の批判的な意見も多い。

『映画の殿堂』という巨大な建造物に込められた理想と、急激な変化にとまどう釜山の人びとは、どのように映画製作を考え釜山のさまざまな映画祭とどのように接しようとし

ているのか。その実態と様子を記録したインタビュー映像をとおして、7年前の釜山の人びとの状況とを比較し考察することで、その問題点を明らかにし、映画・映像と都市の人びととの新たな関係の在り方を展望する。

2) 日本企業の海外進出のあり方について—タイの洪水後の日系企業の動向—

松下 愛

ASEAN 経済の中心的存在であるタイは生産拠点として重要である。しかし、昨年のチャオプラヤー川流域の洪水によって主要な工業団地が浸水し、日系企業の多くが経済的損失を被った。今後、日系企業がタイに留まり、経済活動を存続することのメリットとデメリットについて調査を行い今後の日系企業の海外進出のあり方について考える。

世界の生産拠点となったアジアは、リーマンショックを契機とした世界同時不況からいち早く離脱した。アメリカ、ヨーロッパへの輸出需要が急減し、アジア諸国もその影響が少なくなかった。しかし、アジアには世界人口の六割近くが住み、その潜在的市場は巨大である。10 億人以上の人口を抱える中国、インドの急成長がアジア諸国のみならず、全世界を牽引すると期待されている。

日本企業の中国・インド国内でのシェアは小さく、同国への投資戦略が重要な課題であるとされている。一方、タイは日本からの長年にわたる製造業投資の蓄積で、日系企業の市場シェアは非常に大きい。現地では高品質の部品調達ができることから、今では各企業の単なる生産拠点としてだけでなく、アジアの一大物流センターとしての役割を期待されている。既にインドシナ半島では、アジアハイウェイに加えて、太平洋とインド洋を結ぶ道路計画が次々に打ち出されている。タイの製造拠点としての位置は日本企業にとって今後も重要である。

日本の主要物流企業は、既にアジア全域の中心をタイと定めて、その物流網を築きつつある。タイでは、既に製造業の川上から川下まで育成されている。現地の日系企業にとっては、輸送のリードタイムが短く、かつ低コストで行われることが、アジア各地のグループ企業、ローカル企業への販売を促進し、そのネットワークを広げることにつながると期待される。

本報告では、2011 年のタイの洪水被害の影響を受けたタイの日系企業を調査し、今後の日系企業の海外進出のあり方について報告する。

本報告は、日本経済にとって重要な関係にある ASEAN 諸国、とりわけタイの戦略的重要性について、地理的な位置だけでなく、日系企業の進出動向、現地調達比率及び国別輸出入シェアから、日本経済にとってのタイの重要性を考察する。

アジアの物流センターとしてのタイの現状と課題については、主要物流企業へのインタビューを通じて、モノの流れと今後の展開で物流のボトルネックとなっている部分を明ら

かにする。タイのアジア大物流センター構想に基づいた政策とその効果については、上記した分析を踏まえ、既に民間レベルで築かれつつあるタイの物流センターとしての機能を拡充するために、どのようなインフラ（港、道路、鉄道、コンテナ・ターミナル）がどのようなものが必要かということについて報告する。

タイを中心とする物流網の確立は、A S E A N諸国の地域格差との縮小と経済的・政治的安定につながるだけでなく、日本の経済にとって重要である。

3) ボーダーの認識とボーダーレスへの努力

エドウィン・ライシャワの韓国問題、沖縄問題への関わりと、現代への教訓

高嶋 幸世

(1) はじめに

私はノーマン家。ライシャワ一家の両家と日本とのかかわりが、日本とカナダ・アメリカとの関係、国際問題にどう影響を与えたかを歴史的に考察し、先年学位を西南学院大学からちょうだいした。『宣教師から日本研究者へ』と言う研究だが、その中からエドウィン・ライシャワの朝鮮・沖縄との関わりを中心とし、ボーダーレスな東アジアの友好に寄与するために、どこに差別や仲たがいを生み出す「ボーダー」があるかを探し、相互理解を高めようとした点をこの小論で取り扱うこととした。

エドウィン・ライシャワは一部日本人からは救世主のごとく崇拜され、他の人からは日本を対米従属に陥らせた張本人とされる。アメリカでは1980年代の日本たたきの時代、ライシャワその他の親日派日本研究家が激しく批判された。現在彼らの研究や行動は「古典的日米友好論」に過ぎず、もっと現実的状况に基づくべきだとされる傾向がある。しかし親日派が影響力をなくした北米日本研究界でも基本的な日本観はライシャワら近代化論を基本とし、それに賛否双方からの新たな検討を加えるものである。その意味でライシャワの見解はそのまま現状に適用出来ないが、彼の洞察や行動は、現代の東アジアの問題解決や対米関係の糸口を今も示している。その意味で、ライシャワが経験・考察した東アジア観や経験を今日再検討するのには大きな意味がある。

誤解の原因としてアメリカはスイングドア方式であるため、公務員の職を退いたら後任者に直接影響を与えられない。日本は政官財学がそれぞれの部署に長く着き、暗黙の形で相互に影響を与え合うという違いに主因がある。またアメリカは有力2大政党による政権交代が行われ、それによってブレーンの交代や政策変更が頻繁に行われる。このことが多様な見解を持つ研究者が実現可能な改善策を政府へアドバイスすることにつながる。

ライシャワが駐日大使として着任した頃、彼は歴史学者という枠にとらわれない研究・教育を行い、時には政官界へのアドバイザーを務めていた。このスタイルはアメリカではごく普通のものだったが、ライシャワの著書の中で円仁研究以外は日本の歴史学の基準を外れていたこともあって、学者としての毀誉褒貶につながった。

しかしながら、日本の学問も実際には多くの分野で政官財との共同歩調をとっていた。長期にわたる自民党などの政権の継続、その結果によるブレーンの偏在、特定の層だけが

利益を得やすい状況がすすんだ。一方この流れに反対した側は「純粋な、人々のための学問」を主唱しつつ、実現困難度を上げることも多かった。2009年の政権交代は50年以上にわたった固定システムを一気に打開しようとした意欲は大いに買えるが、実行するにあたっての準備も方法もなかったので、混迷に至っている。日本政府が韓国・北朝鮮問題や沖縄問題を取り扱う際の失敗の連続にもそれが表れている。

今回取り上げる韓国・沖縄問題へのライシャワーのアプローチは、現場に立って徹底して違いを認識し、そのうえで思索を巡らして相互理解と理想に近づけることを目指した。すなわちボーダーを認識しつつ、お互いに幸福感とボーダーレスな相互利益を目指す行動だった。彼の韓国・沖縄への遭遇と関わりを歴史的に検討して、今後への教訓をくみ取りたい。歴史学の決まりとして、その時代に用いられた用語をそのまま使うことをご了承いただきたい。

(2) ライシャワーの韓国体験、戦前と戦後の思考と行動

朝鮮文化保存と研究の展開

ライシャワーが朝鮮を初めて経験したのは、1937年秋だった。9月から北京の燕京大学に留学する予定が、当時アメリカ人は一般旅券で戦乱地の中国へ渡航できないため、特別許可を受けるまでの2か月間、朝鮮に滞在することになったのが始まりである。

ライシャワーは自伝で「韓国が日本に併合されて以後の日本に育った私は、単純に日本での流儀がすべて通用すると思っていたが、行ってみると独自の伝統、独自の歴史を持つ全く異質な国であることがよくわかった」¹と記している。彼は日本生まれであり、アメリカンスクール時代は国語国定教科書や副読本を使っており、大日本帝国流の歴史・文化解釈の影響を受けた。これは他の日本生まれ宣教師子女たちもほぼ同様であった。またアメリカのアジア研究では日本と中国は独自文化として扱うが、朝鮮は亜流の扱いだった。自伝などには慶州の遺跡でたたずむ姿があり、一方朝鮮語のローマ字表記のために京城（現ソウル）や平壤（現ピョンヤン）に長期滞在している。それを意識して渡韓した。

まず慶州は古代には朝鮮が日本より文明が上だったので、慶州が奈良より立派な王都であった。しかし、結果的には奈良が慶州をまねて発展したため、古代文化だけで明確な違いは見つけられない。

ゆえにライシャワーは朝鮮在住宣教師、欧米研究者などの情報で、京城や平壤などで独立運動を行う朝鮮人と知り合い、彼らがもともとの言葉や文化をひそかに守っている様子を知った。ヒュー・ボートンがクエーカー日本宣教師だった1929年の報告書で詳しい手紙があり、同様な体験をしたと書いている²。宣教師の子であるライシャワーも同じ体験

¹ エドウィン・ライシャワー著、徳岡孝夫訳『ライシャワー自伝』、p.112。東京；講談社、1987年

² Hugh Borton letter to US Friend Society overseas office, dated 1929.8.28. US Friends Society Archives,

をしたと推定できる。

国策による朝鮮文化滅亡に抗するため、平壤在住だったジョージ・マッキューイン³と連携して、朝鮮語の標準ローマ字表記を作った。1939年に完成したマッキューイン＝ライシャワー法と呼ばれる表記は、多くの朝鮮人学者が協力して完成した。米軍の朝鮮半島地図に用いられ、戦後も改良されたものが代表的表記の一つとして長く用いられてきた⁴。

第2次大戦時に日本研究者の知恵を結集して指導者たちの承認を受け、「対日占領政策」が作られた。日本に比較的有利な占領方針で、民主化、復興、経済発展に大きなプラスとなった。しかし「対日占領政策」には朝鮮が独自の国家・民族であり、彼らの「民族自決」を促す仕組みはなかった。結果としてアメリカ・ソ連に分割統治を受け、分断国家として戦争や様々な悲劇を生んだ。

これが起こった背景には、朝鮮研究を行う専門家がアメリカにいなかった結果だと考えたハーバード大学アジア学科のジョン・フェアバンクとライシャワーは、1958年にエドワード・ワグナーを担当教員として韓国研究コースを開設した⁵。現在はハーバード大学韓国研究所を持つまで発展し、アジア諸地域を同等の立場で研究する先鞭をつけた。

金大中との出会い、救援活動、民主化達成

ライシャワーは大使時代、日韓基本条約締結による国交回復を支持しており、盟友となった大平正芳外相⁶に早期の締結に向かうよう懇願した。しかし池田政権では懸案が多い基本条約締結には相当な前進があったが、批准には至らなかった。結局同条約は佐藤政権下の1965年に批准された⁷。

大使辞任後はハーバード大学に再雇用され、1968年のロバート・ケネディ暗殺とニクソン政権の発足で政界とのつながりもほぼ消滅した。まだ学生運動の中でライシャワーは保守的と糾弾され、研究教育も停滞した。そのような状況の中で1973年にライシャワーはアメリカ訪問中の金大中と知り合った。

ライシャワーは金大中を評価し、彼に1年間ハーバード大学研究員として過ごすことを勧めた⁸。その後起きる金大中事件についてライシャワーがどの程度概要をつかんでいたか、詳細は不明である。当時は共和党ニクソン政権で、ライバル心旺盛なキッシンジャーが国

Philadelphia PA, USA

³ 1908年ピョンヤンで長老派教育宣教師の子として出生。1930年にオクシデンタル・カレッジ卒業。その後ピョンヤンに戻って教育や貿易で活動。朝鮮民主主義人民共和国成立直後の1948年11月に死亡。

⁴ 同法に基づく辞書は <http://www.romanization.org/main.php> を参照のこと。

⁵ 『ライシャワー自伝』、pp.226-227。

⁶ ライシャワーと大平が50歳を過ぎて盟友となったのは、ともにキリスト者だったためと言うのが、ライシャワーおよび森田一の見解である。

⁷ エドウィン・ライシャワー、ハル・ライシャワー、入江昭監修『ライシャワー大使日録』、p.243。（1965年6月20日付家族あて書簡）、東京：講談社学術文庫

⁸ Letter from Edwin O. Reischauer to Kim Dae Jung, October 29, 1973. HUGFP 73.10 Box 42. HUA. 同日付でエドウィンは在ソウル米大使館にも書簡を送り、助力を頼んでいる。

務長官をしていたため、保安情報概略は流れても詳細は流されなかったとみる。「金大中に悪いことがあるかもしれない、注意」程度と推定する。ライシャワーは引き留めたが、金大中は日韓の仲間と相談すると手紙を出し⁹、東京で金大中事件に遭遇し軟禁された。

ライシャワーは日本での救援運動と連携して、アメリカでの救援運動をはじめ、エドワード・ケネディ上院議員などを使って議会・政府に働きかけた。面会が可能になった際はソウルへ飛んで面会した。1979年に朴大統領が暗殺された後、金大中も自由に政治活動ができるようになり、両者でこれが永続していくようにとの手紙が交わされている。

しかし1980年の光州事件をきっかけに金大中は再び囚われの身となり、死刑判決を受けた。ライシャワーはアメリカ議会を通して釈放や海外渡航を働きかけ、1982年に20年の懲役刑への減刑と病気治療のための海外渡航が認められた際、金大中をワシントンの病院に入院させた。

ここで政界の要人と知り合った金大中は、1983年からハーバードで上級研究員を務めた。当時はフィリピンのベニグノ・アキノ上院議員もハーバードにおり、交友を深めた。しかしアキノが帰国を強行し、暗殺されたのを知って、金大中も韓国に戻ると主張した。ライシャワーやケネディが帰国時に国務省スタッフを同行させることで、金大中の命に別状はなかったが、再び投獄された¹⁰。

ライシャワーと金大中の最後の通信は、1988年の民主化宣言後に政治活動に復帰し、自由な選挙が進んでいるのを喜ぶ書簡類であった。この時すでにライシャワーは病気が重くなり、入院していることが多かった。ライシャワーは1990年に死去したため、金大中が大統領に就任した姿は見ることはできなかった。ただし、ボストンの旧邸書斎には金大中の書がかけられており、金大中にとって重要な師であったことを今も示している。

ライシャワーが救援活動を続けた金大中は後に韓国大統領となり、経済復興や南北首脳会談などおおむね良い業績を残し、ノーベル平和賞も受賞した。ライシャワーの二度目の韓国とのかわりも慧眼であったと言え、今日の韓国社会が発展するためによい役割を果たした。

(3) ライシャワーの沖縄体験、日本復帰支援

ライシャワーが駐日アメリカ大使として赴任した1961年夏に、初めて沖縄を訪問した。彼が高等弁務官事務所よりあらかじめ説明された内容では、琉球人は戦前日本の圧政を憎み、現在の米軍統治による改善を歓迎しており、将来は独立を目指しているということだった。しかし主席公選運動も始まっており、ライシャワーは半信半疑で説明を聞いた。

ライシャワーが実際に沖縄に行くと、ほとんどの沖縄人たちが日本復帰を望んでいるこ

⁹ Letter from Kim Dae Jung to Edwin O. Reischauer, March 9, 1974. HUGFP 73.10 Box 44. HUA.

¹⁰ 関連の書類は HUGFP 73. 10. 2 Box 11 File Kim Dae Jung 1984-85 HUA, に所蔵されている。

とを理解した。キャラウェー高等弁務官の顔も立てつつ、沖縄日本復帰への道筋をつけるべきだと考えた彼は、別れのスピーチで「あなたがた沖縄に住む日本人は」と語り、日本に残余主権があることを表明した¹¹。

ライシャワーは日本国内で反核運動が激しく、沖縄もまた「核抜き・本土並み」で平和憲法を持つ日本へ復帰したいのだと池田・大平などとの対話で理解した。ただライシャワーには大統領との有力なコネがなかった。1962年2月、ロバート・ケネディ司法長官が来日し、早稲田大学で講演した。この講演を成功させたライシャワーはロバートの信任を得、彼を通して将来的な沖縄の「核抜き・本土並み」日本復帰を実現するための助力を求めた。弟からの助言は大きな影響を与え、日米協議に取り上げられることとなった。大平—ライシャワー—ロバート・ケネディの親密な関係を通して、沖縄が将来日本復帰する方向での日米協定枠組みが作られた。それは当面アメリカが統治しつつも、日本の経済援助を増やし、主席公選や衆参議員に議員を選出する方向を進めた。

一方、ライシャワーは沖縄の日本復帰願望は「核抜き、本土並み、平和憲法の下での復帰」であることを知った。一方で歴代大使に受け継がれてきたアメリカ政府の方針、「核兵器搭載艦船のトランジットは日本政府に認めてもらうが、イントロダクションはしない」ことを大平に理解してもらうことだった¹²。

大平はこのロジックを相当理解したようだが、説明が難しいため、池田首相は日米関係に水を差すと公表を否定した。田中内閣では自らが再び外相についたため退陣時をめぐに公表しようとしたが田中は好まず、最後に自らの内閣で衆参同日選後の退陣時に公表するつもりがあったと娘婿で秘書官だった森田一は述べる。しかし選挙中に本人が死去し、その後公表の時期を得られず近年に至ったとのことだ。また、大平が考えた「イントロダクション」論はライシャワーが考えたものより緩く、空母の母港化なども「トランジットの長期化」にすぎないと解釈していた¹³。現職大使の時に岩国基地に空母常駐化を進めたのを阻止した実績¹⁴もあるライシャワーは、空母の母港化はイントロダクションにあたると考え、1981年に「日本への核持ち込み」を公表して問題となった¹⁵。

一方沖縄は返還時に「核抜き、本土並み」でいったん核兵器がすべて撤去された。しかし「緊急時の核持ち込み密約」があったので、現状どうなっているかは不明である。実態

¹¹ 『ライシャワー大使日録』、pp.38-41。1961年8月3日付書簡。『ライシャワー自伝』 pp.323-326

¹² 『ライシャワー大使日録』、pp.129-30。1963年4月6日付書簡。森田一著、服部龍二・昇亜希子・中島琢磨編、『心の一燈』、pp.258-264。
東京：第一法規出版、2010年

¹³ 『心の一燈』、pp.265-276。

¹⁴ ジョージ・R・パッカー著、森山尚美訳、『ライシャワーの昭和史』。pp.389-391。東京：講談社、2009年

¹⁵ 『ライシャワー自伝』、pp.517-518。

を知らせない方針の米軍がいまだ東アジアに残る冷戦状況を理由に、核を「イントロダクション」してこともあろうと想定が付く。また佐藤内閣以来日本政府は米軍基地を沖縄に集約しており、その反発をなだめるために交付金を配ってきた。民主党政権下では普天間を徳之島に移す計画を出したり、硫黄島の訓練を馬毛島に移そうとしたりして、薩摩と琉球の二重支配を受けた地域への配慮に欠けた行動を行った。

沖縄が裏切られたと感じ、反基地運動や日本政府との距離を置く行為に走るのも自然なことである。歴史や取り決めの意味をもう一度日本政府及び本土側国民も学びなおし、復帰運動時の考えをくんで話し合いを行うべきだというしかない。当然沖縄にも自決権はあり、将来起こりうる独立などの際に平和的話し合いで解決することも政府は考慮すべきだ。

(4) ボーダーレスと相互の幸せを追及するには～結びに変えて

ライシャワーは生前、第2次世界大戦に至ったことを重く感じ、アメリカと東アジアが友好的かつ共存共栄するようにと願った。公職就任は駐日大使時代の5年余りだが、残りの時代もハーバード大教授として言説で影響を与えた。

彼の認識パターンは、実際に現実を見、意見を聞き、よりよい結論へと向かうことだった。それはボーダーレスな東アジアを作るためには、どこにボーダーがあり、どうやって折り合っていくかを考える姿勢となった。その結果、戦前の朝鮮が「独自の文化・社会」を持った国であることを認識し、独立運動の正しさを理解した。戦後は金大中の人となりを知って将来の韓国を担う政治リーダーだと分かり、彼を庇護した。大統領になった金大中の南北首脳会談もその教えを実行したと考えられる。

一方沖縄に関しては、ライシャワーは米軍統治時代に復帰運動をする沖縄人と接して、彼らが「核抜き、平和憲法」を持つ日本人になることを願っていると理解した。それゆえに日本復帰がこの方針で決まるように、主席公選実現に動いた。しかし、彼の退任後は佐藤政権下で急いで沖縄復帰に進み、その際の責任者は別グループだったため、「復帰の精神」が忘れられた。ライシャワーは晩年その状況に苦言を呈したが日米双方から無視された。

ライシャワーは1990年に死去したので、その後の情勢変化に基づいた意見はない。しかしながら彼の考えをなぞれば、現状の東アジアへどのようなアドバイスをするかと思いを巡らすことは可能である。ジョージ・パッカーが2009年時点でもしもライシャワーが健在なら、このような言動を取るだろうと著書に書いている。

私の歴史学を離れた私的見解では現在の東アジアの状況や産軍協同体化がますます進んだアメリカに対して、苦言を呈することが多いかと考える。彼の著書『ザ・ジャパニーズ』の最終章「将来の日本」に書かれた最悪シナリオを日本はたどっている。彼の名前は残ったが、考えは忘れられたと考察できる。東アジア諸国の覇権主義激化も過去の歴史を忘れたがゆえに、小さな利権でいがみ合い大きな損失を出す現実を作りつつある。

アメリカの産軍協同体化は常に戦争が組み込まれた国家が出来上がり、アフガンからの撤退を表明したにもかかわらず、ますます中東にのめりこむオバマ政権が出現している。移民や貧しい子供は軍に行かなければ高等教育も良い仕事も得られなくなり、その結果として命を落とす時代となった。宗教・倫理が弱体な東アジアでは金銭崇拜となり、階層の固定化が起きている。このような状況がアメリカ・東アジア双方にとって望ましいものではない。ボーダーの認識なきボーダーレス願望は一部の人間への金銭・権力の集中を起こし、「世界基準」を押し付けられるほとんどの人に不幸をもたらすと考えられる。

このような状況を回避するためにも、お互いがお互いの「違い」と言うボーダーを理解し合い、その上で世界に向かっての大きな益を追及するための「ボーダーレスなき関係」を作り出すことがいま求められている。そのためにもライシャワーらをはじめとした先人の思索や行動に学ぶべき点が多い。

4) 朝鮮・日本・欧米の美術交流の観点から考える韓国近代彫刻

文 芝瑛

朝鮮に近代美術が導入されたのは、1900 年前後であった。絵画のみならず、朝鮮にはすでに伝統的彫刻様式も存在していた。当時の近代美術は、西欧から直接入って来たのではなく大部分が日本からもたらされており、日本化されたものが朝鮮へ入ってくる場合が多かった。朝鮮の伝統的彫刻は、仏像彫刻、建築の一部装飾物、墓彫刻に分類することができるが、概念的には、彫刻自体が独立して存在していたというよりは、建築物の付属物として存在していたという意味がより強かったといえる。そうであるので、独立した存在である「作品」としての「彫刻」は、厳密に言うと、近代西欧と深い関連性をもっていたといえるであろう。

特に、日本留学によって新しい様式と技法を学び、その後、朝鮮に渡った「日本留学生」たちの活躍が注目される。当時、日本には武蔵野美術大学の前身である帝国美術学校、東京芸術大学の前身である東京美術学校など、近代式学校が設立されていた。日本内でもこれらの学校を通じて近代的概念における彫刻家たちが育てられた。両校とも彫刻科が設置されており、教授陣は西欧に留学し新しい彫刻技法を身に付けた日本人教授であったが、東京美術学校には西洋人教授もいた。

東京美術学校在学生の中には、朝鮮、中国、台湾出身の学生が多数を占めていたが、興味深いことに、極少数ではあるが、シャム国（タイ）、米国、アフガニスタン、ジャワ島出身者も含まれていた。

朝鮮人の場合、絵画より学生数は少なかったが、彫刻科にも数名の在学生在がいた。韓国に初めて近代彫刻の概念を導入し、その後韓国において活発に活動したキム・ボクジンもやはり東京美術学校出身であった。

キムによると、「ある日、上野公園を通り過ぎるとき、今の日本美術院展覧会を見学することになりました。作家の名前は覚えてないが、『老子』というタイトルで石膏着色をした彫刻をみたのであります。そこで、私はあちこちと見学し、私なりの工夫を凝らすようになったのです。この日、弟パルボンと一緒にいったんですが、兄弟でなぜか公園のベンチに座って話し合いを重ねた結果、東京美術学校彫刻科に入学してみようという結論に至りました。」と入学の動機を説明している。

当時、東京美術学校の教授には、高村光雲（1852-1934）、建畠大夢（1880-1942）など近代日本彫刻をリードした人物たちがいた。教育カリキュラムの中心は「写実的具象彫刻」

で、対象をどれだけ忠実に再現してみせるのかにもっとも重点を置いていた。特に、キムは、写実的人物彫刻（頭像、立像、座像）である西欧式技法を学び、朝鮮帰国後、美術教育研究所を設立し、教育活動に専念した。以後、これら先輩世代から教育を受けた後輩世代が、新しい世代をまた教育するという順次的教育が進行し、結果的に、それが現美術界の大きな流れを作り上げている。

そこで、本研究では、近代彫刻における「西欧⇒日本⇒朝鮮」という結びつきを美術交流との観点から検討しようとする。特に、資料の比較分析を通じて、彫刻作品の様式比較による日本と韓国の近代彫刻の共通点と相違点がどこにあり、韓国における近代彫刻とは何であるのか、という点を再検討しようとする。

【共通論題研究報告】

報告要旨

5) 境界人としてのサハリン韓人

－韓国でのサハリン韓人の表象の方法－

韓 恵仁

1. はじめに

● 在サハリン韓人の帰国政策は、1989年の母国訪問と離散家族探しを始めとして、1994年の日韓永住帰国模範事業、2007年の日韓永住帰国拡大と、2012年現在まで在サハリン韓人の永住帰国及び一時訪問・逆訪問等活発になされてきた。

● 1989年から実施された母国訪問事業では2012年まで17,270名の在サハリン韓人が韓国を訪れ、2011年から実施された永住帰国者の子女と親戚の訪問は2010年までで3,484名が訪れた。さらに、現在までの永住帰国者は再びサハリンに戻った韓人700余名を除いて2011年現在3,908名が「安山故郷村」、「仁川サハリン同胞福社会館」、「大昌養老院」及び16ヶ所の賃貸アパートで暮らしている。

● 初期には「愛の家」、「大昌養老院」、「安山故郷村」等、在サハリン韓人の集住状態を帯びていたのが、2007年の日韓永住帰国事業拡大に伴い各都市の賃貸アパートに分散移住するようになった。初期の集住状態の場合、韓国社会と直接接する割合が少なかったのに比べ、分散移住の場合は地域民との接触する機会が拡大し、彼等の生活が直に露出するようになった。これは現在の韓国社会の「多文化社会化政策」と併せて肯定的な役割担ってもいるが、一方で韓国の年配者たちには逆差別的な不満の対象になってもいる。

● ここでは、現在までの研究がさして注目して来なかった在サハリン韓人が帰還し始めるようになってから韓国社会が彼等をどのように表象し受け入れて来たのかについて歴史的に探ることとする。また、そのような認識がサハリンからの永住帰国者たちにどのような影響を与えるかについても探りたい。これは在サハリン韓人が韓国に適応しアイデンティティを具現するのに重要な要素のためである。

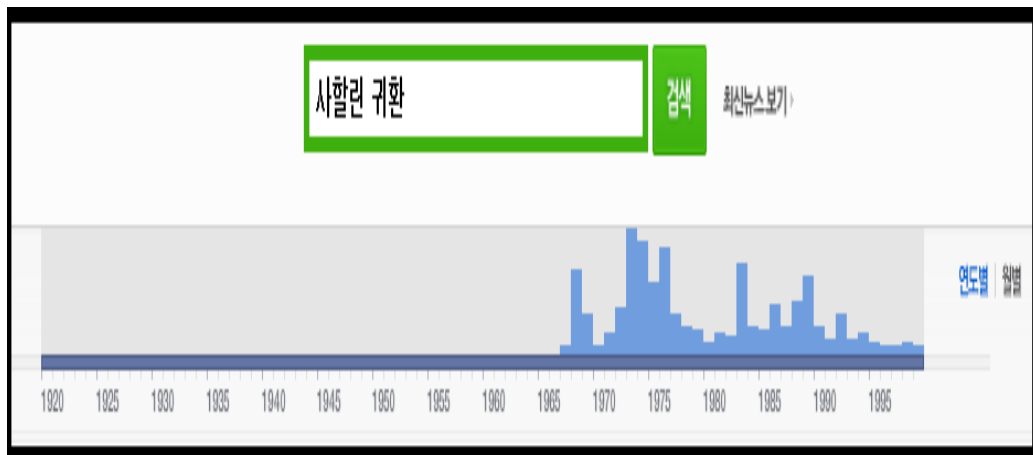
2. 永住帰国以前の韓国社会の在サハリン韓人に対する表象

● 帰還問題が議論され始めた1960年代から永住帰国が始まる前の1999年までの新聞報道の傾向（京郷新聞227件/東亜日報376件/毎日経済53件/ハンギョレ36件）

◎ 1960年代：不法滞在者追放/日本の「北送阻止」のために利用

● 帰還の背景：1956年10月「日ソ共同宣言」によって在サハリン韓人の日本帰還（1958年まで日本人女性の同伴者家族として日本に帰還した韓人は1,794名（486世代））

● 韓国に初めて帰還：1960年4月2日サハリンから日本に帰還したが、まもなく大村収



容所に入れられ抑留生活を強要される。当時日本人妻の同伴者という日本の帰還条件に合わない韓人であったため。彼等は日本に到着した後不法滞在者として約2年近く大村収容所に監禁され、韓国に追放。彼等は故国に到着してもすぐに故郷には帰れなかった。彼等は帰還した故国においても慶南道警視察と外事警で審査を受けなければならない「追放された罪人」に過ぎなかった。

- 韓国のマスコミのサハリン問題報道：1966年以降韓国の新聞には日本に帰還した在サハリン韓人の手記が多く紹介された。彼等の手記に必ず登場するのが社会主義国家ソ連のサハリンの土地で無賃金で強制労働に苦しめられたという経験談と北朝鮮の国籍を暴力的に強制されたという内容。韓国政府は在サハリン韓人を日本帝国の暴力的植民地支配による未帰還被害者という日本の責任論をソ連と北朝鮮による苛酷な強制労働に苦しめながら自由にもなれず貧困に苦しむ同胞を救わなければならないという反共イデオロギーに置き換えた。

◎ 1970年代：暫定的な対南浸透工作員/本格的な反共の対象として表象、反共体制のために利用

- 1970年代「中ソ離散家族会」が大邱にて発足/1972年KBSがサハリン同胞に向けて放送開始

- 洪万吉の一時帰国問題：大々的な報道。ソ連及び北朝鮮体制反対として日本に帰還したと宣伝。しかし本質は、情報収集用であった。洪万吉（1927年生まれ）は、1943年5月故郷である忠南論山からサハリンに強制動員。1969年11月、日本人女性と結婚し暮らしていたが、1973年2月2日に日本の横浜に帰還。韓国政府の努力によって1973年7月1日に韓国一時帰国。7月18日に洪万吉を中央情報部を始めとする9つの専門機関の訊問官15名が共同訊問した報告書『サハリン帰国同胞洪万吉合訊諜報』発刊。

- 一映画「サハリンの空と土地」：金默 1974年。国策映画、巨額の製作費投入して興行

成功。1948 年帰還背景。帰還問題を中心に扱っているが、日本の強制動員よりソ連と北朝鮮の強制労役の野蛮性を強調。日本人女性は、帝国日本を表象するというよりは朝鮮人を助ける善良な妻として描写。

◎ 1980 年代：人道的方法の強調/家族言説として－離散家族再会

- 1983 年、大韓弁護士協議会サハリン同胞帰還推進委員会構成。実態調査及び国連人権委員会に建議文提出。1983 年日本衆議院草川昭三、ソ連の条件付き家族再会を許容する意思を伝達。

- 1983 年 6 月 30 日、K B S 「誰がこの人を知っていますか」 離散家族探し放送、中ソ離散家族。

- 1989 年 8 月には、サハリン放送局－ソウル－大邱 K B S を繋いで 18 家族再会。

- ー1989 年日韓政府間永住帰国決定。韓国外交部’サハリン同胞永住帰国業務処理指針 (1990.1) ’永住帰国者の資格条件に’国内縁故者招聘’必修。

◎ 1990 年代：慰安婦問題と併せて植民地支配暴力として規定。日本の責任強調。

- 日本政府の「50 年パイロットプロジェクト」、実質的に原爆被害者問題と日韓永住帰国模範事業実施。

- 単純に帰国問題ではない未払い金、強制貯金等保障問題を表面的に要求。

- 映画「ミョンジャー明子－ソーニャ」(イ・ジャンホ監督、1992 年)：植民地期からが背景。女性(日本人売春業者に売られた)が主人公。大鐘賞映画祭第 30 回音楽賞受賞作。

3. 永住帰国者に対する住民認識－天安市清水洞の場合¹⁶

<サハリン永住帰国者に対する認知度>

- サハリン永住帰国者の住居の存在に関しては老人 12 名、主婦名全員認知。主婦の場合話し方やファッションで永住帰国者を区分できると話す。

- 在サハリン韓国人が何故永住帰国することになったのかについて、植民地期強制動員被害者のためであると老人 12 名、主婦 8 名全て知っていた。

- 在サハリン韓国人に関する映画、ドキュメンタリー、本等について知っていることがあれば話してほしいとの質問について、老人層は K B S の離散家族探しを覚えていた。映画「ミョンジャー明子－ソーニャ」(8 名全員知っており、観た人は 1 名)、李恢成の小説(1 名)、2010 年 K B S 「ドキュ 3 日－私の祖国、私の故郷」(4 名)を知っていた。

- 永住帰国が日本と韓国政府が協議を通して赤十字社で行われているという事実については大体知っていたが、韓国政府が独自に行っていると思っている人が老人 3 名、主婦 2

¹⁶ 忠清南道天安市清水洞調査概観：2011 年 12 月 13 日～14 日。調査者韓恵仁。住民 38 名面接調査。

名いた。日本に対して補償を要求しているためとその理由を述べていた。

- 主婦の場合、賃貸アパートのためにアパートの値段の心配をしなくてもいいが、万が一一般アパートの場合であればサハリン永久帰国者がいるということでアパートの価格に影響が及ぶと話す（42、ジョン・ジョンヒ）。大体子供たちの多文化教育上役に立つと考えている。

＜サハリン永住帰国者に対する政府補助に対する意見＞

- サハリン永住帰国者の政府補助に関する事項については、老人 12 名、主婦 8 名全員、政府支援があることを知っていたが、具体的な事項については良く知らなかった。老人たちの場合 12 名全員不満を述べた。サハリン永住帰国者のみが植民地被害を受けたのではない。公平性に反するとした。主婦の場合は当然補償をしなければならないのは正しいが、韓国に全体的な老人福祉政策が必要だと話した。

- 二重国籍許容に関連しては老人 12 名、主婦 8 名全員知らず、特別に関心を示さなかった。

＜サハリン永住帰国者との行事に対する意見＞

- 天安支庁、東南区庁、赤十字社におけるサハリン永住帰国者に関する行事は、老人 12 名が大部分不満であった。赤十字社が毎年還暦や古稀の祝宴について一緒に参加もするが、特別待遇だと考える（2011 年 12 月 8 日還暦の祝宴、古稀の祝宴に 12 名全員参加）

- 主婦の場合、サハリン永住帰国者に関する行事に支援奉仕等をしたいが、まだ参加した事はないという。

＜社会主義圏との関連性に対する意見＞

- サハリン永住帰国者とソ連体制及び北朝鮮体制の連関性を聞いてみたところ、”以前は全員アカ”と思ってサハリンから来た若い人は恐らく北朝鮮とつながっていると敵対的に話した（50 代キム・スギ）。60 代層もその話に同意するようなジェスチャーをとった。おばあさんたちはその点について全く言及せず。主婦層は全く関連させて考えていなかった。

- 老人層は社会主義体制で暮らして非常に貧しく過ごしていたのが、韓国政府によって今は富者として暮らしていると不満を吐露した。社会主義体制で暮らして努力する方法を知らないと言う。勤勉ではないと話す。

＜これからの関係作りについて＞

- 全く環境が異なる所で暮らしていたので付き合うのが難しい。言語疎通に問題があり、遊び文化も全く異なるので赤十字社等の機関で実施する行事には一緒に参加するが、お互い付き合うことができないと話す。老人 12 名大体同意。

- 主婦たちは関連行事に奉仕することはできるが、彼等についてより深く知るための他の活動はしないと話した。

4. おわりに

- 敗戦後 60 余年に渡り行われた在サハリン韓国人の帰還は時代の変遷によってその表象方法が異なる。

- 韓国社会に最も影響が残っているのは植民地支配被害者であるという共通意識が存在している。

- 世代別には、老年層は反共イデオロギーの中の敵国民イメージが強く残っている反面、若い層は全く考慮してない。

- 分散移住形態ではあるが、住民と疎通する方法としては赤十字社をはじめとする当局の行事以外には疎通していない。住民たちも積極的に彼等と疎通しようとしていない。老人層は植民地被害の補償をはじめとする政府補助に対して不平等だとする不満が最も多く、積極的に露わにしている。若い層は無関心、あるいは形式的な関心に過ぎず彼等と疎通しなければならない理由を特別に探してはいない。

- サハリン永住帰国者は住民証、二重国籍の許容によって参政権まで付与される韓国国民の位置を占めているが、韓国社会に溶け込んだ'故郷の村の人'になるのは難しい実情。

5) 경계인으로서의 사할린 한인

— 한국에서의 사할린 한인 표상의 방법

한 해인

1. 머리말

- 사할린 한인의 귀환정책은 1989 년 모국방문과 이산가족찾기를 시작으로, 1994 년 한일영주귀국시범사업, 2007 년 한일영주귀국사업확대로 2012 년 현재까지 사할린 한인의 영주귀국 및 일시방문, 역방문 등 활발하게 이루어져 왔다. 1989 년부터 실시된 모국방문사업으로 2010 년도까지 17,270 명의 사할린 한인이 한국을 다녀갔고, 2001 년부터 실시된 영주귀국자의 자녀와 친척들의 방문이 2010 년까지 3,484 명이 다녀갔다. 이와 더불어 지금까지의 영주귀국자는 다시 사할린으로 돌아간 한인 700 여 명을 제외하고 2011 년 현재 3,908 명이 안산고향마을, 인천사할린동포 복지회관 대창양로원 및 16 개소의 임대아파트에서 살고 있다¹⁷.
- 초기는 사랑의 집, 대창양로원, 안산고향마을 등 사할린 한인 집주형태를 띠다가, 2007 년 한일영주귀국사업확대와 더불어 각 도시의 임대아파트에 분산 이주되었다. 초기 집주형태의 경우, 한국사회와 직접적으로 접하는 면이 적었던 것에 비해 분산이주의 경우는 지역민과의 접촉면이 확대되어, 그들의 생활이 직접적으로 노출되고 있다. 이는 현재 한국사회의 '다문화 사회화 정책'과 더불어 긍정적인 역할을 하기도 하지만, 한편으로 한국 노인들에게는 역차별적인 불만의 대상이 되기도 한다.
- 여기에서는 지금까지의 연구가 그다지 주목하지 않았던 사할린 한인이 귀환하기 시작하면서 한국사회는 그들을 어떻게 표상하고 받아들여왔는가에 대해 역사적으로 살펴보고자 한다. 또한 그러한 인식들이 사할린 영주귀국자에게 어떠한 영향을 끼치는지에 대하여 살펴보고자 한다. 이는 사할린 한인이 한국에서 적응하고 정체성을 구현하는데 있어서 중요한 요소이기 때문이다.

2. 영주귀국 이전의 한국사회의 사할린 한인 귀환에 대한 표상

- 귀환문제가 논의되기 시작한 1960년대부터 영주귀국이 이루어지기 전 1999년까지의 신문보도의 경향 (경향신문 227 건/동아일보 376 건/매일경제 53 건/한겨레 36 건)¹⁸

◎ 1960년대 : 불법체류자 추방/ 일본의 '복송저지'의 기재로 사용

¹⁷ 대한적십자사, 사할린한인동포 지원활동, 2011

¹⁸ NAVER 뉴스라이브러리 (<http://newslibrary.naver.com/>)



- 귀환의 배경 : 1956 년 10 월 '일소공동선언'에 의해 사할린 한인 일본귀환.(1958 년까지 일본여성의 동반자 가족으로 일본에 귀환한 한인은 1,794 명(486 세대)
- 한국으로 최초 귀환 : 1960 년 4 월 2 일 한인 가족 6 명과 독신 남자 4 명, 총 10 명이 부산으로 귀환. 1958 년 9 월 사할린에서 일본으로 귀환했으나, 곧 오무라(大村)수용소 간혀 억류생활을 강요. 당시 일본인처의 동반자라는 일본의 귀환조건에 맞지 않는 한인이었기 때문. 이들은 일본에 도착한 후 불법체류자로 약 2 년 가까이 오무라 수용소에 감금되어 있다가 한국으로 추방. 이들은 고국에 도착해서도 즉시 고향으로 돌아갈 수 없었다. 그들은 귀환한 고국에서도 경남도경 사찰과 외사계에서 심사¹⁹ 를 받아야 하는 '추방당한 죄인'일 뿐.
- 한국 메스컴에서의 사할린 문제 보도 : 1966 년 이후 한국의 신문에는 일본으로 귀환한 사할린 한인들의 수기가 많이 소개됨²⁰. 그들 수기에 항상 빠지지 않고 등장하는 것은 사회주의 국가 소련의 사할린 땅에서 임금도 없이 강제노역에 시달렸다는 경험담과 북한 국적을 폭력적으로 강요당했다는 내용. 한국정부는 사할린 한인을 일본제국의 폭력적 식민지 지배에 의한 미귀환 피해자라는 일본 책임론을 소련과 북한에 의한 가혹한 강제노역에 시달리며 자유롭지 못하고 빈곤에 빠져있는 동포를 구출해야 한다는 반공이데올로기로 치환.

◎ 1970 년대 : 잠정적 대남침투 공작원/본격적 반공의 기재, 체제보완으로 사용

- 1970 년 중소이산가족회 대구에서 발족/1972 년 KBS 사할린동포에게 방송시작
- 홍만길의 일시귀국 문제: 대대적인 보도. 소련 및 북한체제 반대로 일본으로

¹⁹ 「10명 귀국예정」, 동아일보, 1960년 4월 1일; □1일 아침 부산에□, 동아일보, 1960년 4월 2일; □처음보는 조국□, 동아일보, 1960년 4월 3일.

²⁰ □사할린 韓國人 悲劇을 증언하는 歸還僑胞들의 좌담회, 경향신문 1967년 3월 13일; □아-望郷 22년□, 경향신문 1967년 8월 15일; □빠앗긴 日月 사할린 귀환교포 김정률씨의 수기□, 동아일보 1968년 3월 9일; □失意의 敵治下 망향 22년, (중) 생활실태□, 동아일보, 1968년 1월 18일.

귀환했다고 선전. 그러나 본질은 정보수집 용이었음. 홍만길(1927 년생)은 1943 년 5 월 고향인 충남 논산에서 사할린 식조로스크로 강제동원. 1969 년 11 월 일본인 여성과 결혼하여 살다가, 1973 년 2 월 2 일 일본 요코하마로 귀환. 한국정부의 노력으로 홍만길 1973 년 7 월 1 일 한국 일시귀국. 7 월 18 일 홍만길을 중앙정보부를 비롯해 9 개 전문기관의 諜問官 15 명이 합동 심문한 보고서 『사할린 歸國同胞洪萬吉合諜報』 발간.

- 영화 “사할린의 하늘과 땅”: 김묵 1974 년. 국책영화. 고액의 제작비 투입. 흥행성공 1948 년 귀환 배경. 귀환문제를 중심으로 다루고 있으나, 일본의 강제동원보다 소련과 북한의 강제노역 야만성 강조. 일본여성은 제국일본을 표상하기보다는 조선인을 도와주는 선량한 처로 묘사.

◎ 1980 년대 : 인도적 방법 강조/가족 담론으로-이산가족 상봉

- 1983 년 대한변호사협회 사할린동포 귀환추진위원회 구성, 실태조사 및 유엔인권위원회에 건의문 제출, 1983 년 일본중의원 草川昭三, 소련의 조건부 가족상봉 허용의사 전달
- 1983 년 6 월 30 일 KBS“누가 이 사람을 아시나요” 이산가족 찾기방송. 中蘇이산가족. 1989 년 8 월에는 사할린방송국-서울-대구 KBS 연결해 18 가족 상봉
- 1989 년 한일정부간 영주귀국결정. 한국외교부 ‘사할린교포 영주귀국업무처리 지침(1990.1)’ 영주귀국자 자격조건에 ‘국내연고자초청’ 필수.

◎1990 년대 : 위안부 문제와 더불어 식민지 지배폭력으로 규정. 일본 책임 강조

- 일본정부의 “50 년 파일럿 프로젝트”, 실질적으로 원폭피해자문제와 한일영주귀국시범 사업 실시
- 단순히 귀환문제가 아닌, 미불금, 강제저축 등 보상문제를 표면적으로 요구.
- 영화 “명자 아끼고 소냐”(이장호 감독. 1992 년) : 식민지기부터가 배경. 여성(일본인 매춘업자에게 팔린)을 주인공. 대중상영영화제 제 30 회 음악상 수상작

3. 영주귀국자에 대한 주민인식- 천안시 청수동의 경우²¹

〈사할린 영주귀국자에 대한 인지도〉

- 사할린 영주 귀국자의 주거 존재에 관해서는 노인 12 명, 주부 8 명 모두 인지. 주부의 경우 말투와 패션으로 영주귀국자를 구분할 수 있다고 이야기함.

²¹ 천안시 청수동 조사개관:2011 년 12 월 13 일, 14 일. 이주자 개관을 위해 노인회장 이병두(68 세, 207 동 702 호)의 면접조사. 12 월 14 일 노인정에 모여있던 노인 38 명(여성 27 명, 남성 11 명) 대상으로 질문면접 조사(조사자 한혜인, 이나리). 2009 년 계획수 874 명 중 99 명이 천안시 동남구 청수동 택지개발사업지구 2BL(버들마을) 국민임대주택(휴먼시아)으로 귀환. 203(17 평형) 207(17 평형)동에 48 세대 거주. 면접항목은 선행연구, 나형욱 2009 년 “영주귀국 사할린 동포 정착실태조사보고서”의 항목을 참조하면서 질의 응답 형식으로 함.

- 사할린 한인이 왜 영주귀국하게 되었는지에 대해서, 식민지기 강제동원피해자이기 때문이라고 노인 12명, 주부 8명 모두 알고 있었음.

- 사할린 한인에 관한 영화, 다큐멘터리, 책 등에 대해 아는 것이 있으면 이야기해보라는 질문에 대해, 노인층은 KBS의 이산가족 찾기를 기억하고 있었음. 영화 “명자, 아끼고, 쏘냐”(8명 전원 알고 있었고 본 사람은 1명), 이회성 소설(1명), 2010년 KBS “다큐3일 -나의 조국, 나의 고향”(4명)을 알고 있었음.

- 영주귀국이 일본과 한국 정부가 협의를 통해 적십자사에서 이루어지고 있다는 사실에 대해서는 대체로 알고 있으나, 한국정부가 독자적으로 한다고 생각하고 있는 사람이 노인 3명, 주부 2명 있었음. 일본에 대해 보상을 요구하고 있기 때문이라고 그 이유를 대고 있음.

- 주부의 경우, 임대아파트이기 때문에 아파트값 걱정을 안해도 돼서 좋은데, 만일 일반 아파트의 경우라면 사할린 영주귀국자가 있다는 것으로 아파트가격에 영향을 끼칠 것이라고 이야기함.(42, 전정희) 대체로 아이들의 다문화 교육상 도움이 될 수 있다고 생각하고 있음.

<사할린 영주귀국자의 정부보조에 대한 의견>

- 사할린 영주 귀국자의 정부보조에 관한 사항에 대해서는 노인 12명, 주부 8명 모두 정부지원이 있다는 것은 알지만, 구체적인 사항에 대해서는 잘 모름. 노인들의 경우 12명 전부 불만을 이야기 함. 사할린 영주귀국자만 식민지 피해를 입은 것이 아니다. 형평성에 어긋난다고 이야기함. 주부의 경우는 당연히 보상을 해줘야 하는 것은 맞지만, 한국에 전체적인 노인복지정책이 필요하다고 이야기함.

- 이중국적 허용에 관련해서는 노인 12명, 주부 8명 모두 모르고 있었고 특별히 관심을 표명하지 않았음.

<사할린 영주귀국자와의 행사에 대한 의견>

- 천안시청, 동남구청, 적십자사에서 사할린 영주귀국자에 대한 행사는 노인 12명이 대부분 불만족스러워함. 적십자사가 매년 회갑연과 고회연에 대해서는 같이 참석하기도 하지만, 특별대우라고 생각하고 있음(2011년 12월 8일 회갑연, 고회연에 12명 모두 참가)

- 주부의 경우, 사할린 영주귀국자에 대한 행사에 자원 봉사 등 하고 싶기는 하지만, 아직 참석한 경험이 없다고 함.

<사회주의권과의 관련성에 대한 의견>

- 사할린 영주귀국자와 소련체제 및 북한체제의 연관성을 물어보니 “전에는 모두 빨갱이”라고 하면서 사할린에서 온 젊은이는 아마도 지금 북한하고 연결되어 있을 것이라고 적대적으로 이야기함. (50대 김수기). 60대 층에서도 그 이야기에 동의하는 듯한 제스처를 취함. 할머니들은 그것에 대해 전혀 언급하지 않음. 주부층에서는 전혀 연결시키지 않았음.

- 노인층에서는 사회주의체제에서 살아서 매우 배고프게 살았다가 한국정부보조로 인해

지금은 부자로 살고 있다고 불만을 토로함. 사회주의체제에서 살아서 노력하는 방법을 모른다고 이야기함. 부지런하지 못할 것이라고 이야기함.

<앞으로의 관계 맺음에 대하여>

- 전혀 환경이 다른 곳에서 살아서 어울리기 어려움. 언어소통에 문제가 있고, 놀이문화도 전혀 달라서 적십자사 등 기관에서 실시하는 행사에는 같이 참여하지만, 서로 어울릴 수는 없을 것이라고 이야기함. 노인 12명 대체로 동의.
- 주부들은 관련행사에 봉사는 할 수 있겠지만, 그들에 대해 더 자세히 알기 위한 다른 활동은 하지 않을 것이라고 함.

4. 맺음말

- 해방 후 60 여년에 걸쳐 이루어진 사할린 한인의 귀환은 시대의 변천에 따라 그 표상 방법이 달랐음. 한국사회에 가장 큰 영향으로 남아 있는 것은 식민지 지배 피해자라는 공통인식 존재
- 세대별로는 노년층은 반공이데올로기 속의 적국민 이미지가 강하게 남아있는 반면, 젊은층에서는 전혀 고려되고 있지 않음.
- 분산이주형태이기는 하지만, 주민과 소통하는 방법으로는 적십자사를 비롯한 당국의 행사 이외에는 소통하고 있지 않음. 주민들도 적극적으로 그들과 소통하려 하고 있지 않음. 노인층들은 식민지피해 보상을 비롯한 정부보조에 대하여 불평등하다는 불만이 가장 많고, 적극적으로 노출하고 있음. 젊은층은 무관심 혹은 형식적인 관심에 불과하여 그들과 소통해야할 이유를 특별히 찾지 않고 있음.
- 사할린 영주귀국자는 주민증, 이중국적의 허용으로 참정권까지 부여된 한국국민의 위치를 점하고 있지만, 한국사회에 녹아든 ‘고향의 동네사람’이 되기는 어려운 실정.

6) 故郷は遠くに在りて：韓国における多文化社会政策と排除の政治

池 直美

1 問題関心と定義

韓国における民族の多様性と多文化社会の現象について

→その根底にある排除と包摂の政治に関心

多文化主義とは？

→民族的・文化的多様性→社会的不安の原因

→同化・統合と対比

移民とは？

→人々が異なる場所（国家、地域）に移り住むこと

2 先行研究

韓国における多文化社会の先行研究

- 移民労働者：韓国の移民労働政策、統合の手段、違法労働者の仕事環境などの研究
- 結婚移民：結婚移民のパターンや傾向、韓国政府の国際結婚の対策、韓国生活への適用、ハーフの子どもたちの周辺化（marginalization）の研究
- 移民政策：移民とその政策の社会的側面、または移民者たちの生活に関する研究
- 「多文化な」韓国の性質：移民労働者や結婚移民の人権を促進するための市民団体の役割に関する研究
- 新しい多文化的な人口学：それ自体の影響と韓国における民族的ナショナリズムへの影響

3 本研究のアプローチ

→民族的多様性について、多くの場合その社会学的な側面に焦点

→本研究は、民族的多様性の政治的な多層的規制過程に注目（political multi-scalar regulatory processes）

→すなわち、本報告は韓国における「多文化」政策とその現象について排除と包摂の政治から視差

4 背景

- 韓国は急速に多文化社会へと発展

1995 年 110,000 → in 2012 年 150 万 (人口の 2.5%)

- この背景には、少子高齢化に伴い人口減少で不足する労働力を確保するため、政府が様々な政策を導入

雇用許可制度(EPS) 2004 年 8 月 17 日導入

国籍法 (1998 年、2010 年改正)

5 労働移民

- 二重の労働市場理論：国際移民は、長期にわたる安い移民労働の需要が要因 (Piore 1979, Stalker 2000)

90 年代以降移民労働を受け入れ(in less skilled and unskilled jobs)

3 K (危険、汚い、厳しい) 3Ds (dangerous, dirty, difficult)

主に中国人 (漢民族、朝鮮族)、ベトナム、インドネシア、タイ、フィリピン、モンゴル、バングラディシュ

EPS 導入後は労働環境の問題等改善、しかし今だ 2 年間限定のビザ発行のみ (延長は基本的になし) →排除

⇒ 民族の多様性は「本当の」労働不足が原因ではなく、多くの韓国人が低賃金のハードな労働を拒絶しているため

6 結婚移民

- 女性の結婚は自らの選択によるものだけではない

⇒国際結婚の場合 (特に韓国のケース)、(1) グローバル経済において不均衡な発展により女性の商品化が生じる (2) 出身国でのプレッシャー、(3) 行き先国における男女比率の歪みに対処するための積極的な女性移民の受け入れ、(4) 結婚ブローカーの存在。

- 1980 年代統一教会の日本人妻が韓国に移民

- 90 年代初めには中国人 (漢民族、朝鮮族)、そして 90 年代終わりにはフィリピン、タイ、モンゴル、ベトナム、CIS 諸国などから移民

7 サハリン同胞永住帰還事業

- サハリン残留朝鮮人・韓国人：日帝時代の「国家総動員令 (1938 年 4 月 1 日) によって朝鮮人が募集、官斡旋、強制徴用などでサハリンに移住、終戦後も残留した人たちやその家族のことを指す

- 1997 年から 2001 年まで「第一次サハリン同胞帰国事業」2007 年から 2010 年までの「第二次帰国事業」を通じて 3800 人が永住帰国
⇒当初は 1 世、離散家族問題に対処するため 2 世まで

8 : 安山－多文化社会のシンボル

- なぜ安山?

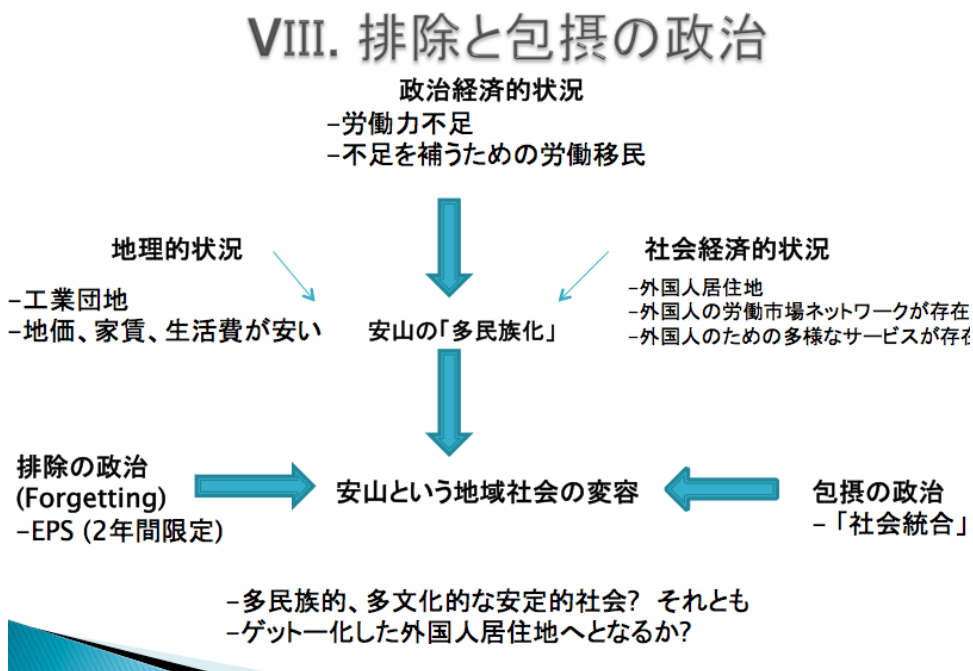
ソウルから近い（地下鉄で 1 時間）

地価が比較的安い

Silwha、Panwol という工業団地が存在

外国人が住みやすいインフラが定着、情報交換の場

サハリン同胞が住む「故郷村」もここにある



参考文献

Nicole Constable, Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 2004)

Ki-soo Eun, “Population Aging and Social Strategies for Aging Problems in Korea,” Korea Journal, Vol. 48, No. 4 (2008)

Andrew Eungi Kim, “Problems and Implications of Korea’s Ageing Population” in Wilhelm Hofmeister (ed.) Ageing and Politics: Consequences for Asia and Europe (Singapore: Konrad

Adenauer Stiftung, 2010)

-----, “Global Migration and South Korea: Foreign Workers, Foreign Bridges and the Making of a Multicultural Society,” *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 32, No. 1 (2009)

Hyun-mee Kim, “The state and Migrant Women: Diverging Hopes in the Making of ‘Multicultural Families’ in Contemporary Korea,” *Korea Journal*, Vol. 47, No. 4 (2007)

Soo-yang Kim and Yeong-gyun Shin, “Immigrant Bridges in the Korean Rural Farming Sector,” *Social Exclusion and Policy Responses*,” *Korea Observer*, Vol. 39, No.1 (2008)

Y.S. Kim, M.J. Kim, G.S. Han, *Female Marriage Migrants’ Experiences of the Cultural Conflicts and the Policy Measures for Intercultural Communication* (Seoul: Korean Women’s Development Institute, 2006)

Donsung Kong, Kiwoong Yoon, and Soyoung Yu, “The Social Dimensions of Immigration in Korea,” *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 40, No. 2 (2010)

Hye-kyung Lee, “International Marriage and the State in South Korea: Focusing on Governmental Policy,” *Citizenship Studies*, Vol. 12, No. 1 (2008)

National Statistics Office (NSO), *Population Statistics and Trends* (2011) and *Nationality and Visa Status of Foreigners* (1994-2010)

6) 「고향은 머리 있기에 (Home Sweet Home?): 한국 다문화 사회정책과 배제의 정치」

지 현주 나오미

1. 문제 제기와 정의

한국의 민족 다양성과 다문화 사회의 현상에 대해 관심

→ 그 근저에 있는 배제와 포섭의 정치를 살펴보다

다문화 주의란?

→ 민족적· 문화적 다양성

→ 사회적 불안의 원인

→ 동화· 통합과 대비

이민이란?

→ 사람들이 다른 장소(국가, 지역)로 옮겨 사는 것

2. 선행연구

한국의 다문화 사회의 선행 연구

이민 노동자: 한국의 이민 노동 정책, 통합의 수단, 위법 노동자의 일환경등의 연구

결혼 이민: 결혼 이민의 패턴이나 경향, 한국 정부의 국제 결혼의 대책, 한국 생활에의 적응, 하프 아이들의 주변화(marginalization)의 연구

이민 정책: 이민과 그 정책의 사회적 측면, 또는 이민자들의 생활에 관한 연구

「다문화인」한국의 성질: 이민 노동자나 결혼 이민의 인권을 촉진하기 위한 시민 단체의 역할에 관한 연구

새로운 다문화적인 인구학: 그 자체의 영향과 한국에 있어서의 민족적 내셔널리즘에 영향

3. 본연구의 시점· 시각

→ 민족적 다양성에 대해서, 많은 경우 그 사회학적인 측면으로 초점

→ 본연구는, 민족적 다양성의 정치적인 다층적 규제 과정에 주목(political multi-scalar regulatory processes)

→ 즉, 이 발표는 한국의 「다문화」정책과 그 현상에 대해서 배제와 포섭의 정치로부터 아프로치

4. 연구배경

한국은 급속히 다문화 사회로 발전

1995 년 110,000→in 2012 년 150 만(인구의 2.5%)

이 배경에는 저출산 고령화로부터 인구 감소로 부족하는 노동력을 확보하기 위해 정부가 여러가지 정책을 도입

고용 허가제도(EPS) 2004 년 8 월 17 일 도입

국적법(1998 년, 2010 년 개정)

5. 사례 (case studies)

(1) 노동이민

(2) 결혼이민

(3) 제사할린 동포

6. 노동이민

이중 노동시장 이론: 국제 이민은 장기에 걸치는 저임금으로 고용 할 수있는 이민 노동의 수요가 요인(Piore 1979, Stalker 2000)

90 년대 이후 이민 노동은 수락(in less skilled and unskilled jobs)

3 K 일어로는 危険、汚い、きつい(위험, 더러운, 어렵다) 3 Ds (dangerous, dirty, difficult)

주로 중국인(한족, 조선족), 베트남, 인도네시아, 타이, 필리핀, 몽골, 방글라데시

EPS 도입 후는 노동 환경의 문제등 개선, 그러나 지금도 2 년간 한정의 비자 발행만(연장은 기본적으로 어려움)→배제

⇒ 민족의 다양성은 「실재」노동 부족이 원인이 아니고 많은 한국인이 저임금의 막노동을 거절하고 있기 때문에

7. 결혼이민

여성의 결혼은 스스로의 선택에 의하는 것 만이 아니다

⇒ 국제 결혼의 경우(특히 한국의 케이스), (1) 글로벌 경제에 대해 불균형인 발전을인해 여성의 상품화가 생긴다 , (2) 출신국으로의 압력, (3) 행선지국의 남녀 비율이 불균등해져 대처하기 위한 적극적인 여성 이민의 수락, (4) 결혼 브로커의 존재.

1980 년대 통일 교회의 일본인아내가 한국에 이민

90 년대 초에는 중국인(한족, 조선족), 그리고 90 년대 후반에는 필리핀, 타이, 몽골, 베트남, CIS 제국등에서 이민

8. 사할린 동포 영주귀국 산업

사할린 잔류 조선인· 한국인: 일제 시대의 「국가 총동원령(1938 년 4 월 1 일)로 인해 조선인이 모집, 관 알선, 강제 징용등에서 사할린에 이주, 종전 후도 잔류한 사람들이나 그 가족을 가리킨다

1997 년부터 2001 년까지 「제 1 차 사할린 동포 귀국 사업」2007 년부터 2010 년까지의 「제 2 차 귀국 사업」을 통해서 3800 명이 영주 귀국

⇒ 당초는 1 세, 이산 가족 문제에 대처하기 위해 2 세까지

9. 안산- 한국 다문화사회의 상징

왜 안산인가?

서울에서 가깝다(지하철로 1 시간)

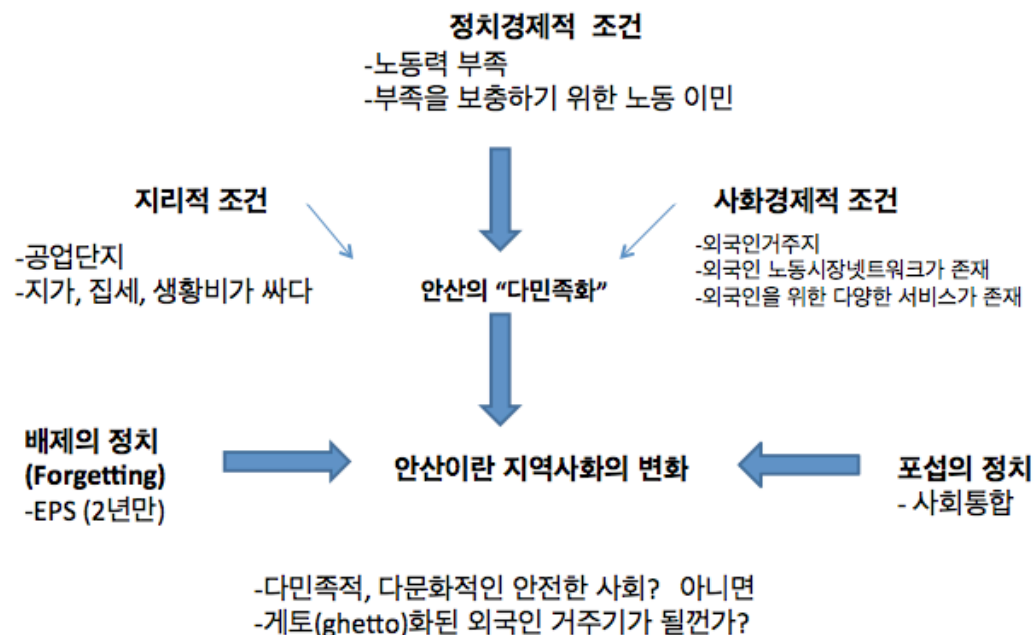
지가가 비교적으로 싸다

Silwha, Panwol 등 공업단지가 존재

외국인이 살기 쉬운 인프라가 정착, 정보교환의 장소

사할린 동포가 사는 「고향마을」도 여기에 있다

10. 배제와 포섭의 정치



참고문헌

Nicole Constable, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 2004)

Ki-soo Eun, "Population Aging and Social Strategies for Aging Problems in Korea," *Korea Journal*, Vol. 48, No. 4 (2008)

Andrew Eungi Kim, "Problems and Implications of Korea's Ageing Population" in Wilhelm Hofmeister (ed.) *Ageing and Politics: Consequences for Asia and Europe* (Singapore: Konrad Adenauer Stiftung, 2010)

-----, "Global Migration and South Korea: Foreign Workers, Foreign Bridges and the Making of a Multicultural Society," *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 32, No. 1 (2009)

Hyun-mee Kim, "The state and Migrant Women: Diverging Hopes in the Making of 'Multicultural Families' in Contemporary Korea," *Korea Journal*, Vol. 47, No. 4 (2007)

Soo-yang Kim and Yeong-gyun Shin, "Immigrant Bridges in the Korean Rural Farming Sector," *Social Exclusion and Policy Responses*, *Korea Observer*, Vol. 39, No.1 (2008)

Y.S. Kim, M.J. Kim, G.S. Han, *Female Marriage Migrants' Experiences of the Cultural Conflicts and the Policy Measures for Intercultural Communication* (Seoul: Korean Women's Development Institute, 2006)

Donsung Kong, Kiwoong Yoon, and Soyoung Yu, "The Social Dimensions of Immigration in Korea," *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 40, No. 2 (2010)

Hye-kyung Lee, "International Marriage and the State in South Korea: Focusing on Governmental Policy," *Citizenship Studies*, Vol. 12, No. 1 (2008)

National Statistics Office (NSO), *Population Statistics and Trends* (2011) and *Nationality and Visa Status of Foreigners* (1994-2010)

7) 東アジアの境界、和解と共生

金 泰萬

1 境界人の条件

- －政治的な理由で祖国より入国が禁止された人
- －民族と資本(労働)の問題で故国(故郷)から出た(追い出された)離散者(Diaspora)
- －他地で民族と資本の矛盾を経験し、その解決のため葛藤
- －日常生活すら決断が必要な行為になってしまう大韓民国
- －境界は人間の被造物、常に看破されている日常は戦争であり緊張であり。
- －言語が終わると世界は終わる。
- －故郷へ帰れない包丁のような厳しい境界
- －知性人を灰色に分類してしまう分断体制の産物
- －「国境が近づくと私は胸いっぱい、涙もろくなってしまった」(ハイネ<ドイツ、冬の童話>より抜粋)
- －傾かない均衡を通じて、葛藤と反目じゃなくて和解へ行くべきだ。

2 映画を通じて見た境界人の現状

- －21世紀の劈頭に領土紛争が台頭されているうちに民族矛盾が浮上
- －東アジアの諸国の歴史的な拮抗過程の延長線の最後に一番凄絶な矛盾の固まりで存在している韓民族
- －日本で居住する在日韓国人を取り扱った「我々には元々国が無かった(우리에게 원래 국가가 없었다)」、「パクチギ(박치기)」、「僕たちの学校(우리학교)」などの3本、韓国での離散者を取り扱った「勇気のある家族(간 큰 가족)」、「境界都市1、境界都市2(경계도시 1, 경계도시 2)」、「パイラン(白蘭)」などの3本、そして中国に居住する朝鮮族の同胞及び脱北者を取り扱った「豆満江(두만강)」、「境界(경계)」、「芒種(망종)」など全てが20世紀前半から中間の国際政治の力学関係の犠牲物であった韓民族の離散と関連された話を取り扱っている。
- －この映画では国際政治、国内政治の状況によって故国を裏切るか追い出されて異国で経験する大変厳しい民族差別または亡命客の悲哀が溢れ出す。
- －しかし、この映画では「離散→苦痛→葛藤→帰還→解消」の過程で結局は葛藤の要因を乗り越えて和解と共生へ歩んでいくパターンを取っている。その経路か方式の多様さにも

関わらず人類の普遍価値への追及に帰結されるのはその自体が人間んの固有な品性であるからだ。

3 和解と共生のため

ー「豆満江」はサッカー、「境界」では筆談、歌、セックス、「芒種」はセックスと歌、「我々に元々国が無かった」と「パックチギ」ではサッカーと歌、「僕たちの学校」、「勇気のある家族」、「境界都市1・2」では帰郷そして「パイラン」では葬儀を通じて和解に辿り着く。

ー和解の方式：理念とか政策(綱領)ではなく感性か遊戯で

ー本当の和解と共生は理念ではなく細かい(?)実践をつうじて

4 トランス (Tolérance：他人の見解・行為への寛容、寛大、認容)を向けて

ー面と線と越えて点のネットワーク社会へ

ー国家と言う面と国境と言う線の意味境界が崩壊された今日、人たちは存在する位置に点で存在する

ー人はその人自体が「個人」でありながら「国民」と「世界人」である。即ち、全ての個人は故郷か国家を離れたり家族から離れたりして、常にノスタルジアの感じながら生きて行くディアスポラ達

ーディアスポラ的な人生自体が近代以降の人類普遍的な存在方式の一つになったためディアスポラと言う意味だけでも世界性を保つ。

5 結論

ー東アジアの国家間の領土を巡った紛争の可能性が漸増している今、20 世紀の冷戦時代の遺産を前向きに克服して、共存と共生のトランスへ行くかについての課題

ーより幅広くて真面目な交流と相互信頼に基づいて東アジアの各国の共同繁栄を追及していくべきだ。

7) 동아시아의 경계, 화해와 상생

김 태만

1 境界人の 조건

- 정치적 이유로 조국으로부터 입국이 금지된 사람
- 민족과 자본(노동)의 문제로 고국(고향)을 떠난(쫓겨난) 이산자(Diaspora).
- 타지에서 민족, 자본의 모순을 겪고 그 해결을 위해 갈등.
- 일상 조차도 결단이 필요한 행위가 되는 대한민국
- 경계는 인간의 피조물, 늘 간파당하고 있는 일상은 전쟁이고 긴장
- 言語가 끝나면 世界가 끝난다
- 故郷을 갈 수 없는 칼날같은 지독한 境界
- 지성인을 灰色으로 분류해 버리는 분단체제의 산물
- “국경선이 가까워지자 내 가슴은 더 세차게 고동치고, 눈 가엔 이슬이 맺히기 시작했다.”(하이네, <독일, 겨울 동화>에서)
- 치우치지 않는 균형을 통해, 갈등 반목이 아리라 화해로 갈 수밖에

2 영화를 통해서 본 경계인의 현상

- 21 세기의 벽두에, 영토분쟁이 대두되는 가운데, 민족모순이 부각
- 동아시아 각국의 역사적 길항 과정의 연장선에 끝자락에 가장 처절한 모순 덩어리로 존재하고 있는 한민족
- 일본에 거주하는 재일동포를 다룬 《우리에게 원래 국가가 없었다》, 《박치기》, 《우리 학교》 등 세 편, 한국에서의 이산자를 다룬 《간큰 가족》, 《경계도시》(1, 2), 《파이란》 등 세 편 그리고 중국에서 거주하는 조선족 동포 및 탈북자를 다룬 《두만강》, 《경계》, 《망종》 등은 하나같이 20 세기 초~중반의 국제정치 역학관계의 희생물이었던 한민족의 이산과 관련된 이야기를 다루고 있다.
- 이들 영화에서는 국제정치나 국내정치 상황에 의해 고국을 등지거나 쫓겨나 이국에서 겪게 되는 처절한 민족차별이나 망명객의 비애가 드러난다.
- 그러나 이들 영화는 “이산->고통->갈등->귀환->해소”의 과정에서 결국은 갈등의 요인을 극복하고 화해와 상생으로 나아가는 패턴을 보이고 있다. 그 경로나 방식의 다양함에도 불구하고 인류 보편 가치의 추구로 귀결되는 것은 그것 자체가 인간의 고유한 품성이기

때문일 것이다.

3 화해와 상생을 위하여

- 《두만강》은 축구, 《경계》는 필담 노래 섹스, 《망종》은 섹스와 춤, 《우리에겐 원래 국가가 없었다》와 《박치기》에서는 축구와 노래, 《우리 학교》와 《간 큰 가족》《경계도시》(1, 2) 등은 귀향 그리고 《파이란》은 장례를 통해 화해를 이룬다.
- 화해의 방식 : 이념이나 정책(강령)이 아니라, 감성이나 유희로
- 진정한 화해와 상생은 이념이 아니라 사소한(?) 실천을 통해

4 톨레랑스를 향하여

- 면(面)과 선(線)을 넘어 점(點)의 네트워크 사회로
- 국가라는 면과 국경이라는 선의 의미경계가 허물어진 오늘날, 사람들은 존재하는 위치에 점으로 존재할 뿐
- 사람은 그 자체가 ‘개인’이면서 동시에 ‘국민’임과 아울러 ‘세계인’이다. 즉, 모든 개인은 고향이나 국가를 떠났거나 가족을 떠나 늘 노스텔지어의 깃발을 나부끼며 살아가는 디아스포라들
- 디아스포라적 삶 자체가 근대 이후 인류 보편적 존재 방식 중 하나가 되었기 때문에 디아스포라라는 의미 자체만으로도 세계성을 지닌다

5 결론

- 동아시아 국가 간 영토를 둘러싼 분쟁의 가능성이 점증하고 있는 이때, 20 세기 냉전시대의 유산을 여하히 전향적으로 극복하고 공존과 상생의 톨레랑스로 나아갈 것인가가 과제
- 더 크고 진지한 교류와 상호신뢰를 바탕으로 동아시아 각국의 공동 번영을 추구해야

8) 日本から『北』へ帰った人の物語り

韓 錫圭

I. 日本から地上の樂園へ

1. なぜ北朝鮮へ「帰国」したのか

1950年代—1960代始めの在日朝鮮人を取り巻く状況と北朝鮮帰国事業

2. 鳴り響くブラスバンド、金日成将軍の歌と歓喜に湧く新潟港から単身で北朝鮮へ

3. 清(チョン)津(ジン)到着

- ・接岸間際の出来事と出迎えの人々
- ・招待所（一時滞在施設）でのこと

II. 北朝鮮での暮らし

1. 出身成分—最下層の敵対階層に分類、教養改造対象として特別監視と差別的待遇を受ける。

2. 配置された町の様子と生活

3. 日本へ経済的援助を求める帰国者

4. 在日朝鮮人の夫と共に北へ渡った日本人妻

5. 1990 後半におきた飢餓「苦難の行軍」について

- ・「第13次世界青年学生祝典」(1989年)の強行。
- ・飢餓が始り推定300万人が餓死
- ・あふれる孤児たち
- ・餓死した帰国者たち

6. 金日成の死とヨーロッパにおける社会主義の崩壊—北朝鮮への期待

7. 帰国者たちのお楽しみ～ホームパーティ

8. 現在の北朝鮮国内の状況

- ・公開処刑 ・体制強化と弾圧
- ・アヘン地獄 ・平壤と地方の格差

III. 脱北

1. 家族にも内緒で脱北を決意した理由

2. 中国に潜伏

IV. 日本へ「帰国」

1. 帰国

2. パソコンを勉強し、最初の本「日本から『北』へ帰った人の物語」を執筆
3. 拉致について
4. 「脱北帰国者支援機構」で脱北者支援のボランティア
 - ・脱北者自立支援（日本語学習、社会システムの違い、職業訓練他）
 - ・日本で生きる脱北者たち
5. 生還者としての使命
 - ・拉致被害者と日本人妻の帰国

韓(ハン)錫圭(ソッキュ) プロフィール

韓(ハン)錫圭(ソッキュ)はペンネーム

1930 年代後半、日本で在日朝鮮人二世として生まれる。

10 代で北朝鮮帰国事業により北朝鮮へ「帰国」。

2003 年、日本から「帰国」した人々と日本人家族の実情を世界に知らせ、何らかの対策を立ててほしいとの一心で、脱北を敢行。数年間、中国潜伏の後、日本に「帰国」。

現在、執筆活動に励む傍ら、オクケトンムにて北朝鮮帰国者〈脱北者〉の日本語教育、料理教室講師などの支援にも熱心に取り組んでいる。

著書

- 「日本から『北』へ帰った人の物語」 2007 年 新幹社



- 「北朝鮮帰国者問題の本質と課題」 (共著) 2009 年 新幹社



8) 일본으로부터 [북]으로 간 사람의 이야기

한 석규

1, 일본으로부터 지상락원으로

1, 왜, 북조선으로 [귀국]했는가

1950년대 ~ 1960년대초의 재일조선인을 둘러싼 상황과 북조선 귀국사업

2, 울려퍼지는 취주악단, 김 일성장군의 노래와 환희에 들끓는 니이가따항으로부터 단신 북조선으로

3, 청진도착

부두도착직전에 있었던 일과 환영나온 사람들

초대소(일시휴식 시설)에서 있는 일

2, 북조선에서의 생활

1, 출신성분 최하층의 적덕계급으로 분류, 교양개조 대상으로서 특별감시와 차별대우를 받다.

2, 배된 읍의 모습과 생활

3, 일본에 경제적 방조를 요청하는 귀국자들

4, 재일조선인인 남편과함께 북으로 건너간 일본인안해

5, 1990년대 후반에 일어난 기아 [고난의 행군]에대해서

[제 13 차 세계청년학생축전](1989년)의 강행

가아가 시작되고 300 만명이 굶어죽다

거리를 방황하는 꽃재비들

굶어죽은 귀국자들

6, 김 일성의 죽음과 유럽사회주의의 붕괴 북조선에대한 기대

7, 귀국자들의 기쁨 가정파티

8, 현재 북조선 국내상황

공개처형

체제강화와 탄압

아편지옥

평양과 지방의 격차

3 탈북

- 1, 가족에게도 말하지않고 준비
- 2, 중국에 잠복

4, 일본으로 [귀국]

- 1, 귀국
- 2, PC 를 사서 처음으로 [일본으로부터 [북]으로간 사람의 이야기]를 집필
- 3, 랍치에 대하여
- 4, [탈북귀국자지원기구]에서 탈북자지원 보란티아
탈북자 자립지원 (일본어학습, 사회체제의 차이, 직업훈련 등)
일본에서 살아가는 탈북자들
- 5, 살아돌아온 자로서의 사명
랍치피해자와 일본인안해의 귀국

한 석규 프로필

한 석규는 필명

1930 년대후반, 일본에서 재일조선인 2 세로 태어남.

10 대에 북조선귀국사업으로 북조선으로 [귀국].

2003 년,일본에서 [귀국]한 사람들과 일본인가족의 실정을 세상에알리고, 그에대한 대책을 세워줄것을바라는 일념으로 탈북을 강행. 수년간 중국잠복후 일본으로 [귀국].

현재, 집필활동을 하는한편, 어깨동무에서 북조선귀국자(탈북자)의 일본어교육, 료리교실 강사등의 지원도 열심히 하고있다.

저서

- | | | |
|---|-------------------------|------------|
| □ | [일본으로부터[북]으로간 사람의 이야기] | 2007 년 신간사 |
| □ | [북조선귀국자문제의 본질과 과제] (공저) | 2009 년 신간사 |

This image shows a completely blank white page. It is surrounded by a thin, solid black rectangular border. There are no markings, text, or illustrations on the page itself.

Sl. No.	Name of the Candidate	Roll No.	Grade	Subject	Score	Remarks
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
31						
32						
33						
34						
35						
36						
37						
38						
39						
40						
41						
42						
43						
44						
45						
46						
47						
48						
49						
50						
51						
52						
53						
54						
55						
56						
57						
58						
59						
60						
61						
62						
63						
64						
65						
66						
67						
68						
69						
70						
71						
72						
73						
74						
75						
76						
77						
78						
79						
80						
81						
82						
83						
84						
85						
86						
87						
88						
89						
90						
91						
92						
93						
94						
95						
96						
97						
98						
99						
100						